

はじめに

この3年間実施されていなかった大阪市会議員海外視察が実行されることとなり、私も参加することができた。

「百聞は一見にしかず」

また、資料だけではわからないその国の環境のもとで、生きた情報を集め、意見交換ができる重要な勉強の機会である。

視察目的としては、ニューヨーク、ワシントンD.C. という特徴ある都市における議員活動について、ほとんどの両親が仕事を持っているビル街、ニューヨークにおける子育て支援について、移民100周年を迎える中で、サンパウロ市と大阪市がかかわった事業を含め、バイオエタノールについて等の視察、特にクリチバ市における環境、都市計画、まちづくり等の調査など、盛りだくさんの計画を持って出発した。

以下、日程に沿って報告します。

第1日目 2月4日（月）

●ABC放送の記者に見送られて伊丹空港を出発し、成田国際空港より日本を離れる。

ニューヨーク現地時間午前10時30分（成田国際空港を午後12時に出発して12時間30分後）ニューヨーク（ジョン・F・ケネディエアポート）に到着する。成田の8倍の大きさで、入国時、両手人差し指の認証登録と顔写真撮影があった。チェックが厳しい。3月になってからは両手10本指の認証に変わる、と新聞記事で見た。

バスに乗り込み、マンハッタン島を走る。ガイドさんよりニューヨーク、特にマンハッタンには200カ国の人々が住んでいて、200の常識があるわけなので、「それは常識です」という日本の感覚は通じない。しっかりと自己主張をし、自己責任で行動すること。買物でおつりをもらったら、その時にしっかり確認しておかないと後から言ってもダメ。道路を渡るときにも、歩行者信号だけを見てはダメで、車をよく見て渡りなさいと注意を受けた。「ここはアメリカなのだ」と再確認する。

ニューヨークは治安が悪いというイメージがあるが、現在は安全になっていて、10万人以上の都市の中で、2005年には3位、2006年には1位の安全なまちになっているそうだ。そんな話を聞きながら、車窓からアーサーシュースタジアム（テニス）、シェイスタジアム（野球メッツの本拠地）、フラッシュン・メドウ公園などを見ながら走る。アパート群が並ぶが築50年では新しいほうで、古いというのは80～90年のものをいうらしい。この感覚は日本と全く違う。



市役所の約束まで時間があるのでグラウンド・ゼロへ行く。2001年、9.11のビルが崩れ落ちるテレビの映像は、誰の記憶からも消えるものでないと思うが、この場所なのだと重い気持ちで改めて多くの方々のご冥福を祈る。

テロそのものに対する対策は国の問題となるが、もしも大阪で起こった時、また各種自然災害が起こった時の大阪市としての対策は、しっかりと準備しておかなければならない。昨年、大阪府と市、自衛隊の共同訓練が実施された。また大阪市では消防局を新築し、各救助隊を効果的に運用するための機動指揮支援隊（ASR）を発足させるなど体制を強化している。



●13時、市役所へ予定より早く着いたが、守衛さんから伝えてもらっても、門の付近の駐車場横で待つことに。4℃。寒い。駐車場の車のナンバーに、councilor（市会議員）と書いてある。車の出入り時には鉄の門が両開きになり、大きな鉄の遮断物が自動的に地中に入り、車の往来が可能となる。セキュリティーがしっかりしている。



ニューヨークは人口約820万人。「決して眠らないまち」「世界の首都」と言われているが、市役所は意外に小さい。



ホール内の銘板に「THE CITY HALL OF NEW YORK BUILT 1803～1812」とあった。1812年にはこのホールに警察、刑務所もあったそうだ。建物まん中の階段を境に、半分は議会、



半分は市長オフィスに分かれている。ニューヨーク市議会事務局次長ラファエル・ペレス氏の案内で市議会内を見学する。

ニューヨーク市を人口 16 万 4,000 人程度の 51 地区に分け、各地区から 1 名の市会議員を選出する。現在、民主党 48 名、共和党 3 名。市会議員の任期は 4 年で、2 期以上できない。欠員補充など特別な選挙で選ばれた人は 2 期以上のこともあるそうだ。

予算は約 550 億ドル。年度は 7 月～6 月なので、法律により 6 月末までに予算を立て、ニューヨーク州の承認をもらわなくてははいけない。遅れたら連邦の担当者が予算をつくることになる。

委員会は 35 あり、7 名くらいで構成される。したがって、議員は 3～5 の委員会に出ることになり、各委員会は 1 カ月に 1 回は開かれる。

1 階の記者クラブにも行った。スタッフは 15 人程いて、ラジオの部屋もあり、毎日、ロビーか外で記者会見があるそうだ。かなりの情報発信力をもっている。



公聴会の部屋に入れてもらった。前に議員が並び、手前から市民が意見を述べている。建築について最近事故が多いというテーマについての公聴会で、そのテーマについてであれば、子どもから誰でもが、前もっての申込みもなく、その日に来て自由に意見を述べることができるそうだ。

日本でこのような公聴会という制度はどうだろうか。

ごく一般的な声を集めるには、意識改革と訓練が必要だろう。

次の部屋ではステイティッド・ミーティングが行われる。議員 51 名全員が出席し、2 週間に 1 回、ふつう水曜日に開かれ、新しい法案についてなど決定する。一般の人も発言はできないが、傍聴はできる。この部屋の壁には、4 枚の大きな絵画が飾られていて、カーテンなどの装飾と共に重厚な雰囲気がした。大阪市でも会議室や通路に絵画を飾ることが必要ではないか。

●次に、ニューヨーク市議会メリンダ・カッツ議員の事務所を訪問し、メリンダ・カッツさん（女性）と意見交換をする。20 階建ビルの 14～18 階が議員事務所である。メリンダさんはクィーンズの全部が選挙地域で人口約 15 万人。

国籍を持たない人は選挙をしないが、人数には数えられている。ランドユーズ委員会（メンバー 25 名。土地をどのように利用するか。何を立てるか等を審議する）の委員長で、この下に 3 つの小委員会がある。建物の高さの審議やサイドカフェ（歩道に出すカフェ）をどこに出して、イスを何個置くかなどについても決定する。

先日メリンダさんは若い人々と日本を訪れ、東京、京都、愛知へ行っていた。そこで

会えた女性は官僚の1人のみ。経済界では0人で、少なすぎるとの感想。私達は8人の議員のうち3名が女性なので意外だったようだ。お互いの議員内の女性の人数を聞いたが、ニューヨーク市議会では51人中女性16人、大阪市会では89人中、女性12人。ニューヨークで州も含めると女性議員は11～18%とのことだ。やはり日本は少ない。



また、市長と議員は無関係で、議員が作る法案に対して、市長は意見も言えない。さすがに民主主義の国。三権分立はきちんと実行されている。

メリンダさんはコントローラーの選挙に立候補しようとしている。コントローラーは市の年金制度（教職、警察、市職員）（予算1,600億ドル）についても決定し、市の監査、財政の管理を行う。市の重要な役目は、①メイヤー②コントローラー③パブリック・アドボケートの3つということだ。

メリンダさんに選挙運動について尋ねた。有権者リストを購入して、個別訪問、電話作戦をボランティア100名くらいで実施する。留守電では、エレクトロ・ホーンを使って自分の声のメッセージを流すそうだ。日本のような街頭演説はしないとのこと。給与は12万5,000ドル/年。運営費として28万ドル/年が出て、オフィスやスタッフに使う。「自分のサラリーではスタッフは雇えません。」

私たち大阪市会議員のスタッフについても、政務調査費で按分何%というのではなく、100%使える制度がないととても厳しいことを、改めて国会で検討してほしいと思った。

● 3時30分、(財)自治体国際化協会ニューヨーク事務所を訪問した。佐々木浩所長、中菌祥所長補佐からBIDについて説明を受けた。中菌さんは堺市から出向しており、また平成19年秋、大阪市職員がBIDをテーマに研修に来ていた。



○BID(Business Improvement District)

BID 制度は、区域内の不動産所有者から負担金として一定額を徴収し、その資金を直接地域の活性化に活用する制度である。ニューヨーク市内では、観光客が多く集まるタイムズスクエア周辺やワールドトレードセンターがあったローワーマンハッタン地区をはじめ、46 の BID が存在しており、それぞれの地域が自らの手法で地区の活性化を行っている。

州によって異なるが、ニューヨーク州の場合、州の法により BID 設立の条件、手続、権限等定められている。BID 設立にあたっては、区域内の過半数以上の不動産所有者の同意が必要とされる。

活動内容は清掃、安全、イベントのように、すぐ目に見えて効果が出ていることがわかるようなものにするのが良い。たとえば、清掃で行政が週 1 回行っているところへ、週に 2 回を BID で追加するなど。

行政はお金を出さなくて済み、議員としては不平等だと言われない点が助かるだろう。BID の運営は、不動産所有者の代表を中心とした理事会によって行われ、自治体の長、地元議員等が理事会メンバーに加わるのが義務づけられている。市は負担金を徴収し、直接 BID に交付する。

説明者の感想として、BID については日本では平等性の論理が発達しているので難しいかもしれない。また、海外との比較において、日本では最低の消費税であって、行政サービスは最高水準だと述べられていた。

そして、平等の論理が発達しているが故に、日本の教育において、自分たちで良い教師を入れることが出来ないことが、日本の教育が良くならない原因の一つだとの話に大いに頷く。

日本では、BID を見本として、日本版エリアマネジメント制度を導入し、大阪ビジネスパーク地区、汐留、みなとみらい等で運営されている。

朝 10 時 30 分にニューヨークに着いて、第 1 日目の全行程を終え、夕刻やっと食事できることになった。

昼食抜きのお腹にも、アメリカのステーキの大きさは、恐怖！

第2日目 2月5日（火）

アメリカでは大いに盛り上がるスーパーボールにおいて、47 年ぶりに、地元チームのニューヨーク・ジャイアンツが優勝して、本日の午前中はそのパレードが行われる。

パレードの終着点となる市役所では、昨日、正面入口で大きな舞台と客席設置の工事中だった。阪神タイガース優勝パレードの比ではなく、午前中は視察の役所対応不可能。各々個人的にニューヨークの町に出る。

昨日に勉強した BID のロックフェラー広場へ行く。写真のまん中がロックフェラーのビルだ。高いビルにはさまれた通路をガーデニングで美しいくつろぎのスペースとしている。その延長上で見おろす位置にスケートリンクがあり、



市民の皆さんがスケートを楽しんでいる。スケートリンクを取り囲む星条旗の数に驚いた。街中でも多くの星条旗を見かけるが、ここでは国旗のオンパレードである。

近くにあるセント・パトリック大聖堂の中に入る。とても大きな教会で、まわりに聖者の像が並ぶ。それぞれの像の前に、小さなガラス容器に入った多くのキャンドルが輝き、心静かな時間を過ごせた。



ニューヨークの地図は分かりやすい。縦が順に、1、2、3番街、レキシントン街、パーク街、マジソン街、5、6番街と続く。横の通りは1st.（1丁目）から始まって 225st.

まで。縦も横も一定の間隔で並ぶ。歩くのに縦の1区画は1分、横の1区画は3分かかるそうだが、どこへ行くにも徒歩何分と計算できる。都市計画から出来た新しいまちらしい。1本だけ斜めに通っている道路があり、これが有名なブロードウェイだ。多くの劇場とホテルが周辺に集中している。



テレビでニューヨーク・ジャイアンツの優勝パレードの様子を見た。道にあふれる人々の数の多いこと。人々の興奮状態はすごい。昼から視察に出るが、その歩道はパレードのあとで、シュレッダーで切った紙だろうか、細長く白い紙が歩道をおおうほど落ちている。ビルの上からたくさんの白い紙が舞っているのをテレビで見たが、これだったのだ。もちろん、すぐ清掃しますとのこと。



● 2時、ニューヨーク市保健精神衛生局を訪問。

デイケア部副局長フランク・クレシウロ氏、保育部集団保育課長ルビー・リチャードソン氏から子育て支援策について説明を聞く。



保健精神衛生局の下にデチャイルドケアセンター（託児所）があり、子どもの栄養・心身の発達問題に取り組む。主に6才以下の子ども、30万人を対象に1万件のデイケアがある。

①ファミリーベースのプログラムは6～12人のプログラムで、アパートの中で子どもの世話をする。州の予算で、仕事を市が請け負っている。スタッフは最低高卒で、2年毎に30時間の研修を受け、現在8,000カ所あり、コストが低くて実現できる点が長所である。

②チャイルドケアセンター（＝デイケアセンター）は2,000カ所ある。1カ所で25～200人くらいまでを預かる。商業施設（ビルの中、店舗など）を使って、規定は1人当り30平方フィート。これは929平方センチメートル。なんと狭い。日本では、乳児室の面積は乳児又は幼児1人につき、1.65平方メートル以上である。非常口、窓枠など消防検査に通ることが必要。ここでのスタッフは大学での専門学位をとった人と学位取得中であることが必要とされる。

私立のチャイルドケアセンターもある。バウチャーシステムといって、市から親に補助を出すこともある。（1,650カ所）

公立は350カ所くらいあって、州と市から補助金が出て1割くらいを親が負担する。

すべて市が予算を出し、NPO が運営している施設もある。施設については、地域によって足りないところもある。

③非公式の施設について

3人以上は届け出なければならないが、親せきや友人などで3人以下を預かっているところは把握していない。3万人くらいいるかもしれない。

年に2,000件くらいの苦情があるが、ほとんどは3人以下の非公式なところのものである。また、3人以下の施設でも、そこが希望すれば認可を与える。

④施設では、就学前の子どもの発達のために、数字の数え方、お絵かき、音楽、体育などを教え、食事を提供する。子どもが熱があったり病気なら、他の子どもとは別にして親に連絡をする。しかし親は働かないといけいないので、子どもに薬を飲ませて預けていく人がいる。

赤ちゃんは6週間から預かる。施設が整っていなければ3カ月からとなるが、プログラムによって違う。(3カ月というのは産休が3カ月なので。)

最近、法律が変わり、デイケアセンターの中の決まりが変わった。

1日1時間の運動。飲物には合成甘味料は使用しない。ミルクは低脂肪、2才以下はテレビを見てはダメ。2才以上ではテレビは教育もののみを1時間まで等、細かく規定されている。

時間としては、一般的に朝7時半から開いていて夕方6～7時にお迎えというのが多い。しかし、夕方5時から翌朝8時という夜働く親のための施設もあり、ここでは子どもは寝ている時間が多いので、スタッフの条件が違う。

ニューヨークは生活費が高いので、ほとんどの親が共働きである。大企業34社は、社内にチャイルドケアセンターを作っている。NPOに委託しているが、これは一般のセンターに入れない、急なときのみ短期入れるというものである。

⑤ウェルフェアプログラム（生活保護のようなもの）を受けるためには、仕事をしないといけいない（ウェルフェア トゥ ワーク）。こんな時は友達に預かってもらうなど3人以下の非公式な所を使っている。

⑥幼稚園（キンダーガーデン）について（文部省の管理）

5才から預り、ふつう3時頃まで。小学校の勉強を始める準備として、小学校に付随していて公立、私立ともにある。

3才からのプリケイ（プレ・キンダーガーデン）もあるが、プリケイ、キンダーランドともに、チャイルドケアの規制には含まれない。

ニューヨークのユニバーサルプリケイは4才からで、州が管理するプログラムで市に委託されていて、これは1日2時間半だけのプログラムである。

⑦虐待について

州にも市にも24時間ホットラインがあり、市には調査機関もある。チャイルドケアとは別の機関となる。

虐待があれば施設に預る（兄弟がいればいっしょに）その間も学校に通わなければならない。

●16時30分、大統領予備選挙投票所である第158パブリックスクールを訪問。

パブリックスクールは、日本でいえば小中一貫校で9年生までである。平日ではあるが選挙のために休校となっている。通りをはさんで向かいに図書館があり、多くの子供の姿があった。



今日はスーパーチューズデイと日本の新聞でも騒がれていた日。公園で支持者が候補者の名前が入ったチラシを配っており、店では候補者の写真や名前が入ったTシャツや、缶バッジなどが販売されている。まさか投票所の中に入れるとは思っていなくて大変興味深く、うれしい。(財)自治体国際化協会ニューヨーク事務所佐々木浩所長のご尽力によるものと感謝する。



佐々木所長と、米国国務省広報局担当官グレゴリー・ケイ氏の案内で投票所に入る。

有権者は受付で名前を言って民主党、共和党のピンクかグリーンのカードをもらって、投票スペースに入る。黒いカーテンで囲われた中に、器械がある。前の大きな棒を倒し、ボードに並ぶ代議員の名前のボタンを動かす仕組みだ。



投票所になっているホールの柱には、クリントン、オバマなどそれぞれの候補者を応援している代議員の名前の表が貼ってあった。4時半すぎ、投票に来ていた人は少

なく、投票所の担当者がいろいろと説明を聞かせてくれた。二度とできない経験だった。

その後、ニューヨーク外国特派員センターを訪問する。投票所に引続きグレゴリー・ケイ氏の案内。



テレビで見たことがあるスペースで記念撮影。大統領予備選挙の開票状況ブリーフィングについては残念ながら、タイミングが合わず受けられなかった。

皆、パソコンを前に仕事をしていた。それぞれの服装がラフ

なのでその場の雰囲気もラフなものに感じてしまう。

本日のグレゴリー・ケイさんは、在阪アメリカ領事館へ来年度来られるとのことだ。日米の各事情についての比較など、有意義な話を聞き勉強できそうで楽しみだ。



●チャイルドケアの勉強をした後、バスに乗ってからどこかチャイルドケアセンターを見学したい旨無理をお願いし、保育施設ブライト・ホライズンの見学が可能となった。子どものお迎えがほとんど終了する6時半頃ならと受け入れてもらった。



ロックフェラープラザの地下にあるプライベート（私立）施設で、ジェニー・マンゲル所長の案内で各部屋を視察する。ビルの入口には、ゲートがあり、自由な出入りはできない。ここは民間会社の経営で、世界中で641カ所もっているとの説明。

生後6週間から14カ月の子ども用の部屋は3室。

保育料は月に2,400ドル（何と高い。よほど高額収入者でなければ入れない。）

14カ月～3才は月1,900ドル。

3～4才、4～5才も1部屋ずつあり、こちらはプレスクール（プリケイ）で月1,700ドル。

全体で80人くらいの施設規模だ。また、バックアップセンターの部分があり、ここでは、6週間から12才の子どもを法人会員対象のみで短期間預かるとのこと。会社が契約して、社員の子どものついて、公立学校が休みの時やまさかの時のみ1～2日預かる制度。バックアップセンターの赤ちゃんの部屋には、ふつう1日に2～3人預かるそう。

施設に入るには、くつにシューカバーをかけるのだが、これから清掃と消毒をする

からとそのまま入れてもらった。部屋の中では消毒のためか、漂白剤ハイターの臭いがする。(子どもに影響はないのか。)

まず、赤ちゃんの部屋に入る。壁に表(デイシート)が貼られ、朝、保護者が子どもの様子を記入していき、あとは先生が記入する。おしめの交換時間、何時に食事をしたか、ミルクを飲んだか。何時に寝て、起きたのかなど1人ずつの欄に記入する。名前の前には色のシールが貼ってあり、その子どもの棚やおむつなど、すべての物にその色のシールを貼って区別しているとのこと。8人の子どもに2人の先生がいるので、表や色のシールは一目瞭然で、日本でも取り入れたらいいかもしれない。

また、壁にリュックが掛けてあり、これは緊急避難用のリュック。救急セットやノートが入っている。避難については10分以内に80人の子どもを連れ出す必要があり、訓練は毎日している。その頻度に驚く。日本ではとてもそこまで徹底していないだろう。

赤ちゃんのマットは床から60cm離すよう法で決まっているなど、所長の話し方は非常にてきぱきしている。

トイレトレーニング用トイレが部屋内にある。台所セットはままごとサイズよりは随分大きく実演できそう。

プレスクールにはカラフルな子ども用コンピュータが数台あるのも、さすがアメリカ。子どもの私物を入れるかごには、名前だけでなく色のシールと写真が貼ってあり、とてもわかりやすい。食事はお弁当の持参だが、おやつは2回出す。施設が大きなビルの地下で運動場などないが、バギーに6人乗って、また、皆でロープにつかまって外へ出るそうだ。

大阪市では待機児ゼロをめざしながら、保育所を増やすことがなかなか実現できずにいるが、2年、3年待っている間に子どもは大きくなってしまう。運動場は公園などで対応することとして、まずはマンションの部屋を借りてでも保育所の増設希望の声に応えるべきではないか。避難用滑り台の設置が無理でも、毎日訓練していれば良いではないか。ここを見学してそう感じた。

急なお願いに対応して、子ども達が帰宅した後の夕方6時30分から、私たちを案内、説明いただいたジェニー・マンゲル所長に感謝申し上げ、空腹の私たちはホテルへ戻った。

ホテルに直結しているグランドセントラル駅の構内にマイケル・ジョーダンのステーキハウスがあると聞き、夕食はそこへ行く。大きな駅のホールの階段を上ると、中2階部分に、ホールに張り出した状態でその店はある。ホールとの間には、ガラスなどの壁もない。喫茶店ならまだありうるかもしれないが、こんな所にステーキハウスを作るのは文化的違いを感じる。強引な店員は「日本人なら、これだ」とメニューを

限定して勧める。勧めにのって見たものの、また大きい。骨付き 500 g のステーキに挑戦しているメンバーもいた。

2 日目が終わるが、もっと長く滞在している気持ちがする。



メトロのチケット販売機



公衆電話で左の位置が低いのは、子ども用か、車椅子用か。

第3日目 2月6日（水）

第3日目はアムトラック（鉄道）でワシントンへ行くため、朝7時10分集合。この時間のニューヨークはまだ暗い。アムトラックがニューヨークを8時に出発し、10時45分にはワシントンに着く。車窓の景色は、すぐのどかな風景に変化する。



テーブルの下に飛行機内のような緊急避難用のパンフレットを見つける。それを見て驚いたのは、すべての窓ガラスの上部に赤い取っ手が付いているのだが、窓を開けるためのもの

ではなく、緊急時、この赤い取っ手を引っぱると、窓ガラスの周りの黒いゴムをはずすことができ、ガラスを押し開け、そこから車外へ逃げることができるのである。日本の列車なら避難出口が数カ所あるのだが、ここでは誰もが、自分ですぐ逃げる出口を作ることができる。日米の考え方の違いを感じた。



到着したワシントン駅は大きなホールとなっていて、上部には聖者の像が飾られ、中2階のティールーム（だと思ふ）が作られていたりしてすばらしい。機能のみの日本の駅とは違って、造りが芸術的で重厚だ。



●12 時、ワシントン D.C. 議会へ表敬訪問に行く。建物前に消防車やパトカーが 10 台以上並び、車はそばまで近づけない。火事ではない。



「建物に爆発物を仕掛けたとの電話が入ったので、全員避難してください」の状況を思い浮かべるが、議会へ行くことを告げると建物の後ろ側の入口からと言われた。議会に入り、公聴会を見学している最中、「何も問題はなかった」との放送が入った。

夕方の話になるが、視察を終えホテルで荷物をかたづけていると、緊急避難の放送が流れる。小さな音だったので初めはわからなかったが、廊下でバタバタと足音がする。私も階段で下りて外へ出る。

宿泊者、ホテル従業員と心配して見守るが何事も起こらず、ホテルサイドの誘導で部屋へ戻る。ホテルの部屋で改めて見ると、壁上方に赤色のスピーカー、ベッドの真上にスプリンクラーがついている。ワシントンへ来て、避難訓練をするとは思わなかったが、いい経験かもしれない。



消防署（赤のドアが開いて消防車が出てくるとは珍しい）

次の朝、ホテルよりの迷惑をかけたとお詫びの手紙が入っていた。

●ワシントン議会の視察はまたも昼食抜きで始まる。

まず、キャピタルバジェット公聴会の部屋に入る。大型資産投資のためのヒアリングということで 395 号線の橋について、7～8 人の議員に対して、一般の方や NGO の方が熱心に意見を述べている。議員も陳情者も 3～5 分の持ち時間で話すとのことで、

スタッフの前に時間表示板がある。

議員との意見交換が熱心に続く。この委員会では交通、住宅、野球場などの大型投資のテーマを扱うそうだ。



クワミ・ブラウン議員と意見交換、ワシントン DC 議会について説明を聞く。



ワシントン特別区は市と州の働きを兼ねている。市民は 60 万人で、8 地区に分かれ、地区から 1 人議員を出す。こちらが州であれば下院にあたる。また、比例区として 5 人の議員が選出され、上院にあたる。合計議員は 13 名。ブラウン議員は比例区からの選出である。予算は 95 億ドル、5 年で 500 億ドルの投資で、オフィスやホテルなど開発していく。

ブラウン議員は経済開発委員会（Planning and Economic Development）の委員長をしている。大阪の北ヤード開発の話を紹介すると、いつでも大阪へ行きますとのこと。議員交流会が実現できればいいと思う。ワシントンでは法律で、国会議事堂とワシントンモニュメントより高い建物は造れない。半径 2 マイル（約 5 キロ）以内の範囲に適用し、市内に限っては高いものは建てられない。



ブラウン議員の秘書イルマ・エスパルザさんの案内で議会内を見学する。5 階が議員の部屋となっていて、ブラウン議員の経済開発委員長の部屋へ行く。

委員長用の部屋と議員の部屋を両方持っている。委員長としてのスタッフは 12 名くらい、議員としてのスタッフは 8 名いる。年間 70 万ドルくらいが支給され、その中で人件費、交通費、消耗品など自由に使える。何人のスタッフをもつかも自由に選べる。また、議員個人のサラリーは、別で年間 9 万 5,000～12 万ドル。途中で条例が変わったので、新しい議員のほうがサラリーが高くなっている。

選挙については任期 4 年で、2 年毎に半分ずつ選挙を実施し、任期の制限はない。現在、13 名の議員のうち 6 名が女性だ。

ブラウン委員長の部屋には、ワシントンの 8 区のそれぞれの開発計画のパネルが並べられていた。大阪市会では委員会や委員長の部屋はなく、委員長のスタッフもないので、こういう状況は目にしない。

議員の選挙運動について尋ねてみる。





車体にペイントした車、ポスター、集会での演説などを行ない、選挙資金集めの運動をする。ボランティアがベースとなる。

ブラウン議員の部屋には、いろいろな人との写真がいっぱい飾ってある。スタッフの方いわく、ブラウン議員は選挙運動が好きな人で、どこでも行くとのこと。実際、私たちと会っている間も、明るく楽しい人だと伝わってくる。

帰りに、ブラウン議員の名前入りマグカップをいただく。これはボランティアで頑張ってくれた人へのお礼に差上げるものだとのこと。日本の公職選挙法では、こういう物を作るのは違反になるだろう。

3階は市長のスペース。市の職員は600人くらい。予算は3月迄に市長が提出して議会が審議をする。新年度は10月1日から始まるので、この審議期間は長い。

大阪市会では予算定例会は2月末から3月末までで、4月1日から新年度となっていて、ワシントンに比して予算審議期間が短い。以前から感じているが、決算の審議を長く行なっても終わってしまったことへの議論だけなので、これから実行される予算についての審議に時間をかけるほうが、発展的で議員の意見を生かすことが出来る。変えるべきであろう。

視察後、昼食をとれなかったもので、近くの The Willard Hotel でアフタヌーンティー。日本ならレストランや喫茶店などが立ち並ぶが、この辺りにはない。このホテルはロビーストの発祥の地とのこと。この言葉の始まりは、ウイルソン大統領が、ホワイトハウスでは葉巻を吸わないでと奥様に言われて、葉巻を吸うためいつもこのホテルのロビーにいた。大統領と会うなら、ここのロビーに行けば会って話しができるということから、ロビーストの言葉が生まれたそう。このホテルの展示室に岩倉使節団が来た歴史が記録されていた。そんな由緒のあるホテルだ。



車椅子の昇降機をもつバスに出会った

●16 時、在アメリカ合衆国日本国大使館を表敬訪問する。ここには日本からのスタッフ 100 人、現地のスタッフ 100 人以上。ワシントンへは地方自治体からの視察はほとんどなく、ニューヨークやシカゴなどへ行ってしまふ。



實生泰公参事官より大統領選挙について説明を、林幸宏参事官よりサブプライムローンなど米国経済の現状について説明を受けた。

民主党の大統領候補は、ヒラリー候補かオバマ候補かで戦われているが、ヒラリーとマケインの決戦になると、マケインが有利かもしれない。ヒラリーの評価は好き嫌いが 2 分されている。オバマとマケインになれば、オバマに決まるだろうとのこと。

特命全権大使加藤良三大使のお話も伺えた。大統領選で誰が選ばれようと日本との関係は変わらず。日本の経済と技術の力、そして文化の力は大きく、日米の GDP を合わせると世界の 40% を占める。日本の強さはトヨタ、新幹線、省エネルギーの技術などで示されている。大統領が変われば日米関係が一瞬ダウンするが、すぐに戻る。ただ落ちる幅を小さくする必要はある。また、アメリカの中で両党の変化が起こっている。共和党 (RED) は中身が変わってきているし、民主党 (BLUE) は労働党から中道化してきて、共和党でも良かったような候補者が出ている。共和党初代大統領リンカーンは大きな政府を打出したが、それを今、民主党が言っている。

1980 年のレーガンは、リンカーンと反対のことを主張した共和党の典型である。両党の戦いは 1968 年、ニクソン対ハンプリー (ニクソンはベトナム戦争で行詰まり、老と若の対立が起こった)、1992 年、ブッシュ父対クリントン (世代交代となった)。今回の大統領選は、80 年ぶりに副大統領が出ていないこと、民主党は黒人と女性、共和党は 71 才とモルモン教徒の候補者で、興味深い。

党員集会とは、区毎に学校や協会に集まり誰を支持するか決めるが、会場で 15% の人を集められなければ脱落となり、別の候補を選べる。区レベルから始め、州レベルへと上げていく。

民主党は比例配分方式をとり、共和党は総取り方式をとるが、このほうが早く決まる。オバマは党員集会のところをすべて押さえている。予備選を早くやることの意味は、その後に影響を与えるメリットと、運動員やメディアが来て経済効果を生む。しかし、早すぎたはペナルティーで代議員数にカウントされないのだが、心理的な影響を考慮している。

現在の候補者と日本の関係について述べると、マケインは対日理解はよい。小さい政府指向で、経済についてはわからない。日本にとっては 1 番よい。ヒラリーは取り巻きの人が問題で、日本の微細な点に理解がない。オバマはデータが少なくてわから

ないが、ブレーンをみるとつきあいやすい人が多い。ロムニーは対日好感度が高く、経済運営が手堅く行政手腕もある。

大使館としては、人脈作りが1番プレッシャーとなる。将来出世しそうな人とは早くからコンタクトをとっておく。弁護士、補佐官、シンクタンクの人など発掘をしておくこと。そして日本に役立ちそうな人を出世させることも大切であるとのこと。

私は、世界の中の日本として大きな存在感を示し続けるには、外交力をもっともっと磨いて強くしてほしいと思っている、特にアメリカにおいては。大使館の皆様にエールを送る。

●夕方は、在アメリカ合衆国日本国大使館石井公使主催の夕食会に招待していただく。石井正文政務公使、五嶋賢二経済公使、室田幸靖一等書記官、上野裕大一等書記官と、大統領選や日米関係、また大使館での仕事、アメリカでの生活などについて懇談した。外務省次官の下に省の審議官があり、その下に局長、その下に審議官がある（審議官が2つあってややこしい）。

省の審議官は、次官になるかなれないかを争った人の役職で、そのあとやめることになる。外務省次長には、自衛隊から6人入っている（陸海空から各々2名）。住むにはニューヨークは生活費が高くて落ち着かない雰囲気。その点、ワシントンは住むには条件が良いとのこと。地図で見ても、公園や博物館などが多くて子どもを育てるにもいいと思う。

第4日目 2月7日（木）

●今日は、午前中、ケネディセンターを訪問して、昼から飛行機でニューヨークへ戻り、そのままサンパウロへ飛ぶ。飛行時間は、ニューヨークまで1時間10分、サンパウロまで9時間45分、ニューヨーク時間19時30分発、機内泊でサンパウロ現地時間8時15分着の予定。

●朝9時出発し、ワシントン市内を視察。

国会議事堂。すべての大きな道は国会議事堂から始まり、番地も外へ向かって並ぶので、住所は東西南北をきちんとと言わないと他の所へ行ってしまう。

国会議事堂のテラス側は、大統領就任演説の場所だ。上院議員535名が左側で、下院議員435名が右側。中に地下鉄が入っている（10人くらい乗りのトロツコのようなもの）。

バスの車窓に多くの桜の木を見る。1909年、尾崎東京都知事が2,000本の桜をワシ

ントン D.C. へ送ったが、検疫で焼却されてしまう。2年後、3,000 本が送られ、セントラルパークに植えられた。桜のお礼にバージニア州の州木であるハナミズキが贈られている。

リンカーン記念堂を訪れる。有名な演説が壁に刻まれている。左右から見ると、厳しい様子とリラックスしている様子で違うと教えられ、写真を撮る。南北戦争や奴隷解放について読んだ物を思い出しながら、各界で活躍している黒人の人々、またオバマ候補を思い浮かべる。

ワシントンは緑が多く広々としている。建物の高さ制限がされているのにつれて雲も高さ制限があるのかと思うほど、真横にまっすぐ広がっていて不思議だった。

●ケネディセンターで日本展「ジャパン！カルチャー＋ハイパーカルチャー展」をしているのを見学に行く。ひときわ目を引く芸者ロイドは、芸者ではなく、和服の若い女性の姿だ。正面のマイクで英語で質問すると答える。話すときに顔の表情筋が動き、手、指のつくりなど細部まで人間のようだ。



この催しは2週間にわたり、日本の古代からの伝統に現代感覚と技術革新が組み合わされて作り出された新しいハイパーカルチャー展だ。ロボット・アニメや450人のアーティストによる演劇から建築、彫刻、映画までが紹介される。現在の日本は、新しい文化力の発信によって、世界から認められていることを実感する。



●スミソニアン自然史博物館のほんの一部分だけを覗いた。映画の撮影現場となった恐竜の展示室を見る。スミソニアンはいくつもの建物からなっていて、全部見るには数日かかり、これらすべてが個人からの寄付だと聞いてびっくりする。

●アメリカ政治の中心、ホワイトハウス前へ行く。数台の車で出て行くブッシュ大統領は遠くに見えた。政治的重要性を思えばとても重いものを感じるが、この周辺の

広大な芝生の広がりや青い空は開放感で心を明るくしてくれる。日本の子ども達に、今必要なもののひとつだろう。

明日はいよいよブラジルだ。

第5日目 2月8日（金）

●朝8時15分、サンパウロに着く。27℃晴れ、アメリカとの温度差23℃。

在ブラジル日本国大使館の酒井了さん、なにわ会副会長山本さん、坂倉さんが空港で迎えてくださる。酒井さんは休暇を取って、私たちの案内をしてくださるとのこと、感謝。

移動のバス内で、坂倉さんと山本さんが自己紹介やブラジルについて話して下さる。

1958年神戸移民局で手続きをして、船で58日間かかってブラジル、サンパウロに着いた。住宅は広く、食料も豊かで安くておいしい。政治、経済、教育の場には日系人が多く、世界の中で日本人の評価が最も高い。1世は6～8万人で、平均65歳くらいである。日系人は155万人だが60%は混血である。

もうお一人は1963年にブラジルに渡った。国家からの運賃補助があり、10年後返却となっていたが、3年後に返却しなくてもよくなった。当時8,000万人の人口で、親切でおおらかな国だった。日本人はガランチード（誠実・正直）と評価され、これは先輩方が信用されているおかげだ。現在、人口は倍の1億5,000万人くらいで、貧しい人が子どもが多くて、治安が悪くなっているとのこと。アメリカ、ドイツ、ブラジル系の会社に勤めていたが職長どまりなので、日系の会社へ移り課長になれた。給料が倍近く違う。ここでは、公立大学は無料だが、そこへ入るには私立のレベルの高い高校へ入れなければならないのだ。

在伯大阪なにわ会は1965年8月25日創立され、10名のメンバーでスタートしたが、今は250名のメンバー。もう1世の人はほとんどいないとのこと。

＜ポルトガル語＞

ボンジューヤ・・・おはよう

ボンワタルジ・・・こんにちは

オブリガード・・・ありがとう

（女性はオブリガーダ）

ボルファボール・・・プリーズ

チャオ・・・さようなら

●サンパウロ市議会日系議員との昼食会に出席する。ウシタロウ・カミア議員、アウレリオ・ノムラ議員、ゴウラール議員と懇談。

隣の席の日系議員の方は、日本語が通じなくて会話ができなかった。残念。

●サンパウロ市議会を訪問し、日系議員の案内で議会内を見学する。

サンパウロ市議会は議員数 55 名、うち女性議員 6 名。政党はかなり分かれている。

＜各党名と人数＞

議員数— 55 名

(政党別構成)

・労働党	12 名
・ブラジル社会民主党	12 名
・民主党	7 名
・共和党	5 名
・ブラジル労働党	4 名
・緑の党	3 名
・進歩党	3 名
・民主労働党	2 名
・ブラジル民主運動党	2 名
・人民社会党	2 名
・ブラジル社会党	2 名
・ブラジル共和党	1 名

サンパウロ市では、議会選挙が 2008 年 10 月 5 日に、また、市長選も同日に実施される。

議員の給与は 7,500 レアル（約 45 万円）で、1 議員は 21 名のスタッフを使える。うち 3 名は公務員。あと上限 18 名のスタッフを 70,000 レアルで雇うことができる。ちなみに市長は 9,000 レアルである。

議場には、国旗、州旗(多い)、市旗、聖パウロの絵が飾られている。議員席には、電話と計算機のようなスイッチが置かれている。議員の暗証番号を打ち込み、賛成・反対・棄権のボタンを押す仕組みになっている。



委員会室（小議場といわれた）は公聴会を開くが、イスが 13 個×11 列、しかしこれでもテーマによっては入りきれないことがあるとのこと。アメリカ同様、各部屋には多くの絵画が飾られている。ブラジルの歴史を表している絵画もあり、ぜひ大阪市でも実行してほしい。ここでは、議会訪問のサインを行い、訪伯の目的等につい



て記者会見があり、木下団長が代表で答える。この大阪市の議員団訪伯の記事が、次の日新聞に出て、記念に頂戴する。

●次に、市議会内において、市の公共事業局清掃部幹部の方との面談を行う。

清掃部長ウェベル・シローニ氏、分別回収担当部長ワグネル・タヴェイラ・ダ・シウヴァ氏、分別回収調整官アントニオ・ジ・パドゥア・シャガス氏、分別回収技官パウロ・ホーザ・アフード氏、環境教育調整官マノエウ・ドス・サントス・フィリョ氏の幹部職員 5 名からサンパウロ市の廃棄物行政及び環境教育について、大阪市の協力事業の結果を踏まえて説明を受ける。



2004 年、大阪市とサンパウロ市との間で、サンパウロ市固形廃棄物管理プロジェクトについて JICA の協力のもと開始予定だったが、サンパウロ市の事情で（市長が変わったことで課長級以上がすべて変わる）協力の内容の見直しが行われ、2006 年から実施された。内容は、行政職員の研修、

学校及びコミュニティを対象とした環境教育・啓発活動の支援及びリサイクルの仕組みづくりで、2007 年 8 月末までの間、大阪市として職員、学校教員等の研修生を受け入れ、また大阪市より職員を JICA 専門家とともに派遣し、活動の支援、指導、評価を行った。要望により 2008 年から 3 カ年、協力事業の継続を行う。

サンパウロ市では、焼却ではなく埋め立てをしている。もちろん、不浸透化を図っている上だが。土壌汚染については、州の扱いとなり、廃棄については、一般廃棄物とは分け自己責任でやる。再生される資源ゴミ（乾燥ゴミと呼んでいる）は少なく、リサイクルを今の 5 % から 8 % にはしたいと考えている。タイヤの処理は州の担当だが、リサイクルを始めている。

説明後、私から街中の「集積所」について、大きさなど具体的に答えてもらうよう質問をした。集積所は、コンテナ様で 600～1,000 平方メートルに 1 つ、今は 25 カ所だが、96 区すべてに作りたい。住民が、粗大ゴミ、タイヤ、ソファ、木材など業者が

扱わないような小規模なものを入れて市役所で定期的を集める。

埋め立てる量は、南西部と北西部の2カ所をあわせて9,000トン/日。内訳は、ゴミ3,000トン/日、建築廃材4,000トン/日、医療系100トン/日、他に大雨のときの泥や伐採した木などがある。

環境教育については、大阪市の後藤さんからミッションがあったが、ここでは義務教育の中には入っておらず、その点、日本がうらやましい。上水の周辺の住民や貯水池周辺の150の学校に対し教育をする局所的な事業はある。

埋立地の将来については、80万～120万平方メートルで約10年でいっぱいになる見込み。埋め立て跡地については、20年間管理して公園などにする。環境リスク評価をして、公園以外の利用も考える。たとえば、40年前の跡地には、ショッピングモールを建てている。埋立地の地下水の問題については、その周辺では地下水利用が禁止されるとのこと。

経済成長と環境政策については、今は都市計画がしっかりしているのでよいが、過去は、洪水が起こる川沿いには住宅を建てたので、その問題解決にあたらねばならない。

ホームレス（テント居住者）の住宅問題は、州のICMS税、連邦政府のFGTS年金の一部を充てている。また、15のリサイクル共同組合があり、そこで仕事をしている（日本移民が農協などの組合を作ったことが組合の始まりとなっている）。内容は、市が場所、設備、車を提供して、売り上げが報酬となる。報酬は高い人で1,000ドル/月（約10万円）となるが、差がある。高級住宅街を担当すると、リサイクルする物が高いので報酬が高くなる。

環境問題は、どの国でも大きな課題であり、今後ますますその重要性は高まる。後日の環境都市として世界に名高いクリチバ市訪問が楽しみである。

●この後、サンパウロ市役所へジルベルト・カサビ市長を表敬訪問し、平松市長からの親書を手渡す。

●サンパウロ市国際局長アルフレード・コタイ・ネット氏との懇談で、局長より、「大阪とはすべてが接点であり、問題点も似ていると思う。大阪・サンパウロ両市の姉妹都市提携40周年にこのような場を持ち、両市の関係強化のチャンスである。」との話があった。

●19 時 30 分、サンパウロ・大阪姉妹都市委員会主催歓迎夕食会

在サンパウロ日本国総領事館丸橋次郎主席領事、姉妹都市委員会高木ラウル会長、花田ルイス氏をはじめ、日系の各団体の方々と夕食をともにしながら懇談。

さとうきびから作ったお酒は、ライムをたくさん入れて飲む。めずらしい。

ブラジル日本移民 100 周年記念事業「日伯・友情の森」プロジェクトのポスターを見て説明を聞く。明日、この友情の森に記念植樹に行くことになっている。

●夜 11 時、ブラジル日本移民 100 周年記念式典会場（サンボドロモ）を視察する。

今年 6 月 21 日に式典が予定されている会場である。サンパウロ・カーニバル入賞チームのショーがあり、日系チームが入賞しているので、と姉妹都市委員会の方々も同行される。夜中の 11 時から始まり朝まで続くという、時間感覚が理解できない。



実際に見てその迫力に驚く。1 チーム 1,000 人から 3,000 人ぐらいで、約 500 メートルの会場となる。通路をそのチームが通り過ぎるのに 50 分くらいかかる。単に踊るのではなくストーリーがあって、何台かのフロート、踊り手がそれを表現する。各チームの最後に、オレンジ色のユニフォームのお掃除部隊が出る。紙ふぶきやいろいろなゴミが出るので、ほうきで掃きながら進む。その都度清掃すれば、会場はきれいだし、合理的。そしてお掃除するのが楽しそうに見えた。

日系チームの出番は夜中の 2 時半。帰って寝たいと思うが、日系の姉妹都市委員会の方がお出でなので帰るわけにも行かない。私たちは昨日、夜間の飛行機でブラジルに到着し、そのまま視察の行程を進めてきているのだ。眠い。しかし、日系人チームを見せてもらってよかった。連獅子の衣装で始まり、着物風の衣装やフロートがとても趣向を凝らし、すばらしかった。これは日本ではなく中国だというものもあったが、海外の人から見ると同じように見られるのかもしれない。



ホテルへ午前 4 時前着。明日は午前 9 時集合。厳しい。

第 6 日目 2 月 9 日（土）

●朝 9 時集合し、バスで約 2 時間走って郊外のピラシカバ市に行く。バスを降りたと

ころは一面のさとうきび畑である。暑い。日傘が必要だ。大阪とは違い、日陰に入ると涼しい。

●州立サンパウロ大学バイオエネルギー研究サポートセンターメンバーのネルソン・セラさんの案内で、さとうきび畑を視察する。遠方に工場が見えるが、今は雨季のため稼動していない。



●州立サンパウロ大学へ行く。建物はいくつにも分かれているが、入った建物は木造で、各部屋も小さく、暖かい雰囲気のものだった。廊下には、学位を取った方々だろうか。古い時代からの写真が並んでいる。名前を見ていくと、日本名がかなり多い。2割はある。昨日の日系の方々の話で、ブラジル社会の中で経済、教育の場で、日系人が多く活躍しているとあったがその証だとうれしく思う。

●先ほどのネルソン・セラさんからバイオエタノールについて、農学部教授ジョゼー・オタヴィオ・ブリートさんからサンパウロ大学について説明を聞く。



クッキーと水を勧められて初めて気づいたが、アメリカでは説明を聞くときに水さえ出されなかった。絶えずお茶が出る日本との文化の違いだ。

○バイオエタノールについて

ブラジルでは、バイオエタノールにはさとうきびから作る。さとうきびから作るのは、砂糖 45%、アルコール 55%となっている。さとうきびは1年間で収穫するが、1つの根から6～7回育つ。1～3月は雨季なので甘みが少なく、5～9月の乾季は糖分が高く収穫する時期である。

エタノール製造の新しい工場は、毎月1カ所増える。さとうきびには、サンパウロ、ユーナス、ゴーヤス、パラナなど国の南部の6州が1,200ミリメートル/年の雨量で適している。アマゾン雨量が多すぎて適さない。2007年には45,000万トンを700万ヘクタールで生産し、前年比15%増となっている。農作物1億



3,000 万トンの内訳は、大豆 6,000 万トン（5,000 万ヘクタールの面積）、とうもろこし 5,000 万トン（1,000 万ヘクタール）、米 1,200 万トン、豆 300 万トン、麦 100 万トンである。

放し飼いの牛 1 億 8,000 万頭には 2 億ヘクタールの面積が必要だが、そのうち 1 割はさとうきび（カンナ）を植えるのに適している。牛の放牧地がさとうきびに変わってくるが、そのほうが収入が多いし、外国資本が入って、さとうきびに変更されていく。2007 年全体の 15%が外国投資となっている。

さとうきびは、75%が水分、14%が繊維、11%が葉。この水分を遠心分離すると 2 割が砂糖となる。また、発酵、蒸留すると 15 時間でエタノールとなる。工場では、搾りかすを燃やして、このエネルギーで絞り汁の濃縮などを行っており、工場内のエネルギーはまかなえる。この点が、環境的にも経済的にもアメリカのとうもろこしからの製造よりも優位な理由である。2007 年 180 億リットルを生産し、うち 30 億リットルは輸出、150 億リットルを国内使用した。アメリカへも輸出しているが、とうもろこしのエタノールを守るため、カリブ海経由でアメリカに入る。

現在ブラジルでは、150 万台の車のうち 85%はバイオエタノールを使うフレックス車。使用者はガソリンスタンドにおいて、アルコールかガソリン（先に 25%のアルコール混合）の安いほうを選ぶ。アルコールは、生産の時期や生産地との距離によって値段が変わるのだ。エタノール輸出のパイプラインの計画は、日本については三井物産や伊藤忠が世界銀行の支援を受けて進めている。



また、5 年前から大会社が個人会社を買収し、今は 5～6 社が全体量の 50%を占めている。ブラジルの石油会社も輸出用に 5 工場持っている。海外資本は、イギリス・フランス・アラブ・アメリカ、日本も少し入っている。

ブラジルのアルコール車の開発は、オイルショックの時から始まった。ガソリン車にアルコールを入れていたが欠点があり、アルコール車を作ったが評判がよくなかった。アルコールは農産物なので値段が上下し、また、アルコールだけではパワーが 7 割しか出ない。その後、フレックス車が開発されて良くなっている。

●続いて、ジョゼー・オタヴィオ・ブリー教授からサンパウロ総合大学について説明を受ける。

この大学は、サンパウロ州立で日本でいうと東大にあたり、ブラジルの博士の 6 割はサンパウロ大学の出身者が占める。本部はサンパウロ市にあり、周辺に 5 つの研究

所がある。300名の教授のうち9割は博士。農業、林業、経済の学部があり、このピラシカバ市の大学は農業学部で800ヘクタールの広さ、104年の歴史をもつ。ブラジルの農業の技術、特にバイオエタノールの研究はここで行っている。

世界の材木について56%はエネルギーになっている。ブラジルは世界第3位の材木消費国であり、54%はエネルギーとして使っている。その40%は炭を作っている。アメリカが製鉄所で使う炭を作るために植林を行っていて、エタノールと植林が今後10年間の大きな活動となる。

ブリート教授から、日本では炭を燃料以外の特殊な使い方をしているそうなので、その資料がほしいとの依頼を受けた。よき日本文化が広まるかもしれない。大学構内を案内してもらう。まるで森の中だ。

●予定時間に随分遅れて、サンパウロ市内のチエテ・エコロジー公園に着く。

ブラジル・ニッポン移住者協会主催でブラジル日本移民100周年記念事業として展開されている「21世紀の森作り」全伯植樹キャンペーン「日伯・友情の森」プロジェクトの一環として、公園内の日伯・友情の森の一角に1人1本ずつ記念植樹を行う。



植樹委員会の小山さんから、市と契約して会社・団体が木を植える。ブラジル全体で100カ所に植える計画と聞いた。近くにサンパウロ大学の環境学部のキャンパスが見えた。この公園内には、サルやいろんな動物がいるということだが、私たちは「ワッチ」という強大なリス、猫くらいの大きさでアライグマのようなシッポをもつ動物に出会った。

第7日目 2月10日（日）

●朝からなにわ会の方々と、イビラプエラ公園内のブラジル日本移民開拓先没者慰霊碑に献花と署名をし、お線香を上げる。碑の後ろ側地下部分に、観音像や仏像がまつられている。日曜日なので公園は大変な人出で、それぞれピクニック、ジョギング、ローラースケート、サッカーを楽しんでいる。





●日本館の視察。桂離宮風に建てたとのこと。池のコイが見事で、日本の工芸品がいろいろ飾られている。庭には、皇太子殿下・清子様のお手植えの松、前小泉首相の植樹もあった。温度が高いので、育つのが早い。



●なにわ会館にて在ブラジル大阪なにわ会の皆様と交流昼食会。下平尾会長より、ブラジル移民の歴史、なにわ会についてお話を伺う。



1908 年第 1 弾の移民の方々は、奴隷のような扱いを受け、伝染病もあり大変苦勞された。それから 100 年。日本の文化、心、日本語の発音を 1 世の人から伝えられた。戦争もあり苦勞をしたが、県人会を作り伝えていき、留学生や研修生の交換をしている。今までは、大阪から補助金をもらっていたが、2000 年から止まっている。他の県人会はそうではない。交流を行うため、なにわ会のために何かしてほしい、と要望された。

この会館では、婦人部中心に、生け花、お茶、日本語教室、ヨガ、空手、コーラス、カラオケ、ダンスと種々な活動をしている。

会員の方々との会話の中で、「この会館を建てるため、父が何度も大阪へ行き苦勞した。いざ建設となったとき、3 ケタのインフレになり、研修生の寄宿舍やエレベーターの工事が予算的に駄目になった。」、またある方は、「嫁に遠慮で、家では日本語で話さないの、なにわ会へは日本語で話すのを楽しみに来ている。」と言っていた。私の地元の方の甥にあたる人がいらして、数年前、日本の大学へ通っていた話を聞いた。

また、5歳の子どもを幼稚園に通わせているお母さんは、「昼から日本語学校にも行かせている。日本語もちゃんと覚えさせたいから。」と話され、その子どもさんは「お手てつないで」を歌ってくれた。

ブラジルには多くの日系の人たちがいるが、今日ここで会えた方は、成功した方、裕福な方ばかりだと思われる。

「次ブラジルに来るときは、マットグロソ州へも行ってください。日本がすっぽり入るくらいの平野が広がり、その真ん中を7～8メートルの高さの堤防の上を列車が走る。堤防の向こうは、川の水が氾濫するので、それを田んぼにするのです。」と。そんな広大な風景、ぜひ見たいと思う。

●北海道県人会に北海道から空輸された雪で雪だるま祭りをしている会場へ行く。北海道の熊やアイヌの彫り物が、大小いっぱい展示されている。ブラジルの人
は雪を見たことがないので、雪をもらって食べている人など、大喜び。人の高さの雪だるま、民謡の歌や踊り、売店も出て、大変な盛況ぶりだ。韓国のメロンキャンディーが大ブレイク。ブラジルにはメロン味はないそうだ。商売上手だ。



大阪となにわ会の交流に何かできることはないだろうか。

●夕方近くなって、リベルタージ地区（東洋人街）へ行く。



日本移民史料館

ブラジル日本移民史料館を視察する。100 年前の生活状況、映像や写真で知る歴史、3フロア分、とても値打ちがあった。移民された日本人の工夫と努力に感激した。

1971 年、姉妹都市提携を記念して命名された「大阪橋」を見る。車道の上を横断しているこの橋は、数人で欄干にもたれたら落ちてしまいそうだ。修復



してほしいと言われるはずだ。

東洋人街は、昔は日本人街だったが、中国や韓国の人が多く来て、名称が変わったそうだ。



第8日目 2月11日（日）

●朝7時30分集合し、国内線空港へ向かう。サンパウロ発、11時過ぎにクリチバ着。市長官房長官ルイ・キヨシ・ハラ氏、環境局長ジョゼー・アントニオ・アンドレゲット氏、都市交通公社総裁パウロ・アファンソ・シミッチ氏と昼食をともにしながら懇談。全行程元クリチバ市環境局長中村ひとしさんが同行し、詳しく説明をしてもらう。シュラスコ料理。木下団長より、今回の視察においての地上での最後の食事だとの言葉。夕方、クリチバから飛行機に乗れば、あとは飛行機を乗り継いで大阪へ向かうだけだ。

本日、最後の1日、興味深いクリチバのまちをしっかりと視察したいと思う。

●在クリチバ総領事館を表敬訪問し、佐藤宗一総領事から、クリチバ市、パラナ州の概況について説明を聞く。中村ひとしさんからの説明をあわせて記述する。

○パラナ州 州都クリチバ市

パラナ州は、1950年代からは大豆、小麦、とうもろこし等のブラジルでも有数の農業州として発展してきた。また、1970年代に入り、クリチバ工業団地の建設等を通じ、内外の企業誘致が推進され、クリチバ首都圏を中心にルノー、クライスラー、ダイムラー、フォルクスワーゲン、アウディ等の外国自動車メーカーが相次いで進出した。

日産も2000年進出を果たし、小型トラックを販売している。

○教育について

パラナ州では、初等教育（義務教育、7歳から14歳）が8年間、中等教育が3年間（15歳から17歳）、高等教育（18歳から22歳）となっていたところ、伯国内の教育制度改革を受け、2007年からは初等教育が6歳から14歳までの9年間へと移行しつつある。また、ほとんどの学校では、授業時間は、初等教育は午前、午後の2部制、中等及び高等教育は午前、午後、夜間の3部制となっている。ただし、中等教育課程以上に進むのは少数で、大部分が初等教育で社会に出ているのが現状である。学期は、前期2月11日から7月初め、後期9月から12月中旬。

○国際的環境都市、クリチバ市。人口約180万人、面積432平方キロメートル（大阪市の約2倍）、自動車100万台。

ブラジルの1地方都市、クリチバ市がなぜ都市計画、交通政策、環境政策において、世界の専門家の注目を集める都市になったのか。

① 人を大切にする街づくり

- ② できるだけシンプルな市民が理解しやすいプロジェクト
- ③ 経済的にも技術的にもクリチバ市にあったプロジェクト
- ④ バスシステム計画にもみられるように、100%完璧なプロジェクトではなく、シンプルな、そして素早い実践を重視して実行した。なぜなら都市の中の問題は、爆発的な速さで進むからだ。

以上の説明の中で、特に大きな計画を立てれば実現に何年もかかってしまい、出来上がったときには現状に合わないこともある。無理のない範囲で、すぐ実行できることに取り組むほうが進みながら変えていけるよさがある。・・・この部分に大阪市会議員としてとても納得した。大阪市もこうあるべきだと思う。

クリチバ市は姫路市と姉妹都市だが、大阪市とは 1994 年から 2000 年まで 6 年間、環境についての姉妹都市提携を結び、お互いに技術者の交流を図っている。

クリチバ市を変えたのは、1971 年、33 歳で市長となったジャイメ・レルネル氏だ。「人が中心の街づくり」を掲げ、土地政策、緑地政策、交通政策を進めた結果、名もない地方都市であったクリチバ市を、都市計画の見本とまで称えられる都市にした辣腕の市長だ。のちにパラナ州知事になっている。

緑地政策の羊による緑地の管理については、バスの車窓から公園にいる 3 頭の羊を見た。羊の群れに草刈をさせることで、経費が 80%節約でき、環境都市のイメージアップにもなっている施策だ。羊を使うとは楽しい施策である。ここでは、市役所の許可なく樹木は切れないが、樹木を 1 本切れば新たに 2 本植えなくてはならない。私有地においても、緑化保全のため制限を受けるが、減税してもらえるなど厳しいが人の気持ちがわかる制度になっている。これらの政策で、緑地面積は 1 人当たり 55 平方メートルにもなっている。(1971 年は 0.65 平方メートル)

- クリチバ市役所を表敬訪問し、都市交通公社総裁パウロ・アフォンソ・シミッチ氏、都市交通公社交通部経費管理室長ダニエウ・コスタ氏から、バスシステム等都市交通施策について説明を受ける。



○クリチバ市の交通政策

優先順位は、人・バス・乗用車の順。

1972 年、都心の繁華街から車を追い出して、花通りを作った。できるだけ車を使わない都市計画を作り、交通計画と土地利用計画を統合的に考えていく。また、予算的に、地下鉄ではなくバスを地下鉄的に走らせる方法を考えた（速い・安全・時間どおり・乗り換え可能）。快速バスを走らせるため、チューブ型ステーションにし、バスが来るまでに料金を支払い、バスの乗り降りに段差をつけないなど、時間節約の工夫をしている。



市は、道路、ターミナルの整備を行い、バス会社はバスの購入。人を雇い、管理する。URBS（交通公社）が、時刻表、料金設定、走るコースを決め、10 のバス会社を統括してバス会社へ走った距離によってお金を支払う（乗る人数は関係なし）。

交通システムは補助金なしで黒字経営となっている。電車は荷物を運ぶものしかなく、人の移動はバスかタクシーで行う。また、自転車専用道路は 150 キロメートルつくっている。

バスの料金は、障害者、老人（65 歳以上）、5 歳までの子どもは無料。（全体の 15% は無料の人）。定期券は、1,000 レアル/月以下の低収入の家族の学生は 50%、家庭に 2 人の学生がいれば割引率が上がる。

1974 年にバスをつくってから、タクシーは 1 台も増えていない。バスは、340 路線（延べ 1,100 キロメートル）、3 連結バスには 250 人が乗れる。総利用者数は、クリチバ市 230 万人/日、全地区で 350 万人/日（これには往復の人を含む）。また、バイオディーゼル（大豆の油）で試験的に走らせたり、アルコールをどれだけ入れるかについても検討中である。

以上の説明を聞き、交通システムの視察も詳しく行いたかったが時間不足のため、中村ひとしさんから説明を受けながらバスの車窓から、バス専用チューブ型バスステーション、バス専用レーン、トライナリーシステムと用途地区、シティズンシップ・

ストリート（バスターミナルと区役所、商業施設との複合施設）などを視察する。

●次に、ヴィラ・ヴェルジ第1地区の環境寺子屋教育の視察を行う。



不法占拠されているスラムの土地を市が購入し、35～40年のローンで安く売る。これまで市の対策が悪いと苦情ばかりの人たちが、自分の家となると協力し、きれいに整え始める。人はただ与えられると部外者になってしまい、プラスにならない。家をローンで買うことや、緑の交換プログラムのようにその人に何かをさせることで、その人の協力を得られて施策がうまくいく。この中村さんの話は、政策を考えるなかで大切なことだと思われる。

環境寺子屋教育は、スラムの子どもたちが犯罪やドラッグで死んでしまうのを防ぐため、子どもたちの集まれる場所を作り、ここへ来たら食べられるということで集めて教育をする。お絵かき、工作、運動、レクリエーションや環境学習を教える。対象は、5～12才の子どもだ。この地区では、1990年にスタートした頃300人いたが、今は130人を2部交代で実施している。スタッフは、昔はそうでなかったが、今は先生の資格をもつ人があたる。こういう施設が34あるが、地域は78ある。数人の子どもにあったが、目がキラキラしていて明るい。



○環境政策について

①ゴミ買いプログラム

ファベラ（スラム）では、道路がないなどの問題でゴミ収集トラックが入れないので、それによって悪環境をつくった。住民がゴミ収集の仕事をしたと受け止め、清掃業者が食料で払う。その食料は、中央青物市場での売り残りや近郊中小農家から過剰生産物を割安で買う。環境的に正しい生活は、質のよい生活、しかも経済的にもプラスになることを確認させる。

②ゴミでないゴミプログラム（いわゆる再生可能ゴミ分別収集のプログラム）

市民の意識を改革する目的で、環境教育として実施。なぜ分別するかをはっきりと分からせる。小学校から始める。結果は、市民としての誇りにまで高まった。



③緑の交換

クリチバ市内の低所得者家族の多い地域について、分別収集の意識を高めるための

方法として実施。再生可能ゴミと食料を交換。ゴミに対しての意識を変える。

緑の交換プログラムは、プログラム終了後に現地に到着したため視察できなかった。



元クリチバ市環境局長 中村ひとしさんは、本日の行程に同行して、熱意を込めて私たちに説明してくださった。もっと見てほしい、と空港への時間が気になっている添乗員さんを見無視して、時間ぎりぎりまで案内してくださった。クリチバ市の環境施策については、もう1日かけてすべてを視察したかったと思う。残念だった。



19時25分、クリチバの空港を離れ、サンパウロ、ニューヨークを経由して、一路大阪に向かう。



あとかき

今回の視察においては、ニューヨーク市、ワシントン D.C.、サンパウロ市、クリチバ市との友好親善を深め、議員活動、子育て支援、都市計画、まちづくり、環境施策、経済活動等多くの調査を行いました。

議員活動については、大阪市では、あらゆる市民相談、政策課題についての調査研究、政策立案などの活動を自分一人で取組まなければなりません。

しかし、今回視察した各市においては、1人の議員につき、スタッフを数人から18人まで公設でもつことができて議員活動の補佐を行なっていることは大変な違いでした。

また、まちづくり、福祉、すべてにおいて、市民との協働が強く感じとれて、これこそがこれからの大阪市再生にとって本当に必要であり、市民協働のしくみづくりをしっかりと進めていかねばならないと感じました。

この度、各都市の先進的な事業、特長ある施策について学び、意見や情報の交換を行なった成果を今後の大阪市の政策、発展のため生かしてまいります。

最後になりましたが、今回の海外視察に際しまして、お世話になりました関係者の皆様に心からお礼を申しあげ、報告とさせていただきます。